

# ときどきは、辛口

16

## ◆“知る”と“わかる”

### 一 坪農園

今年の四月から一坪農園を借りて農作のまねごとを始めた。

まだ見よう見まねの試行錯誤の連続でたいした成果もあがっていないが、ひとつわかったのは当たりまえのことながら、雨が降るのがどんなに有難いかということである。

二、三日雨が降ったあとに畠へ行ってみると、大根や春菊の芽が青々と勢いよく伸びている。従来は雨が降ると、また雨かと思うだけだった。気分もふさいで来るし、傘が面倒だの、ズボンの裾のぬれるのがいやだのと思

うだけだった。

しかし農作のまねごとをしてみると、雨はなんと有難い天の恵みであることか。知識としてはむろん知っていた筈なのに、その有難さは七十歳のこの年になって身にしみてわかった。

それとともに“知る”と“わかる”の違いも身にしみてわかった。“知る”と“わかる”

なんて同じことのように思う時多かったので、ほとんど別のものと言っているほどに違う。

長いあいだ大学の教師をつとめて、知るという作業にばかりかかわってきた。時折われに返って、なんのために知るんだと自問して



松本道介  
Matsumoto Michisuke

みると、当然ながら、なにか大切なことを“わかる”ためであるという答が返ってくる。なるほどとは思うものの、“わかる”ためには多くのことを知らなければならぬとあって、また知る作業に戻る。知るべきことは限りなくあるからその作業はおのずと“知るために知る”に戻ってゆく。

### ロイド・ジョージの名言

そんなことをくりかえしてきたせいか、私にとつて過去の偉人たちの述べた言葉の中で一番長く頭に残ったのは、“知る”と“わかる”にかかわるものだった。それは第一次世界大戦からその戦後にかけての大英帝国の首相ロイド・ジョージの言葉である。

「ポアンカレは何でも知っているが、何もわかっていない。ブリアンは何でもわかってはいるが、何も知らない」というのだが、まずは多少の注釈が必要だろう。

ポアンカレもブリアンもフランスの政治家である。第一次大戦後のフランスでは、敗戦国ドイツからどれだけの賠償をとるかが大問題だった。五十年前の普仏戦争に敗けて賠償金をとられた恨みもあるし、大戦四年間の主

戦場だった北フランスが滅茶苦茶になったせいもあって、ヴェルサイユ講和条約はドイツに天文学的な数字の賠償金を課した。

しかしドイツ側は払えないものは払えないとあって居直りをきめこむ。それどころかドイツの右翼はナチスを含めてヴェルサイユ条約破棄をスローガンにして勢力をのぼしてくる。

このままでは平和などやってこないと感じて、ドイツへの譲歩を考えたのがフランス首相のブリアンである。イギリス首相のロイド・ジョージも同じ考えを持ったため、「ブリアンは何でもわかる」と表現したのである。

しかし、フランスの世論はこれに大反対で、議会はブリアンを首相の座から引きずりおろして、ポアンカレに代えた。ブリアンと反対に経済の知識も豊かなポアンカレは鋭い論理を駆使してドイツに賠償の履行を迫った。

このあたりを評してロイド・ジョージは「ポアンカレは何でも知っているが、何もわかっていない」と言ったのだし、ドイツの巨額の賠償をめぐるいざござは十年以上続いた末に、ヒトラーの独裁体制が生まれ、第二次世界大戦に突入する。

とは言え、平和志向のブリアンが首相の座にとどまっていれば、すべてがうまく行ったかどうかは誰にもわからない。したがってブリアンが正しく、ポアンカレが間違っていたなどという結論は下せないが、ロイド・ジョージの言葉だけは私の頭を離れない。

それはたぶん私の長年の職場だった大学という場所が、「何でも知っているが、何もわかっていない」人間にみちみちているからだろう。むろん私自身も「何でも知っているが、何もわかっていない」人間の一人であること、を言いそえておかなければならない。

と同時に私はどう見ても「何でも知っているが」と言えるほどの秀才タイプではない。自分の専門についてはふつうの人より多少多く知っているといった程度の人間ながら、最初に述べたように、「知る」といういとなみは長く続けていると「知るために知る」におちいってしまった、本来の目的である「わかる」の方はえてして忘れがちになる。

とりわけインターネットなどの普及で「知る」といとなみが容易になってくると、肝腎のことなどどこへやら、知識というより情報が溢れんばかり押し寄せるなかで、自分がいっ

たい何を知ろうとしていたのかさえ忘れてしまいかねない。

となると目指すべきはブリアン型であろう。だが、「何でもわかっているが、何も知らない」となると、これは一種の仙人である。第一、現実のブリアンがまったく何も知らなかった筈はないし、肝腎のことがわかる程度には十分な知識をそなえた人だったにちがいない。

### 天の理、自然の摂理

では肝腎のこととは何か。たぶん天の理とか自然の摂理とかいったものであろう。だが天の理や自然の摂理とはこれこれのものだといったことは辞書にはむろんのこと、いかなる本を見ても書いてない。したがって我々は天の理や自然の摂理を知ることはできないのである。

おそらく個々の人間が懸命に生きるなかで自分なりに感じとったり悟ったりしていくしかないものなのだろうが、そうした理や摂理には時代や国をこえて驚くほど共通するものがあるのではなからうか。

(中央大学名誉教授)